

古文書講座レジュメ

(1) 基本的知識

○飛騨郡代とは

江戸時代に四か所設置された郡代の一つです。飛騨のほか関東(埼玉県)、美濃、西国(大分県)に置かれていました。飛騨国は、江戸時代のはじめ金森氏(飛騨高山藩)の所領になっていました。元禄五年(一六九二)、藩主の金森頼時が出羽国上山に移されると、飛騨国は幕府直轄領となり、民治を司る代官が置かれました。

○高山陣屋とは

幕府直轄領を管理した飛騨郡代の役所です。高山城の下屋敷が利用されました。徳川幕府崩壊後、明治新政府は、幕府直轄領である飛騨国を接収し、廃藩置県よりも早く、明治元年(一八六八)五月に飛騨県(後に高山県に改称)を置き、高山陣屋は、そのまま高山県役所として存続しました。さらに、明治四年十一月、飛騨三郡が、信州松本に県庁を置く筑摩県の管轄になると、高山陣屋は筑摩県出張所として利用されました。

○古文書とは

特定の相手に意思を伝える文書のうち、近世以前のものをさす場合が多いです。差出人、受取人、伝える意思等が要件となります。特に相手が定まっていない日記や編纂物等は古記録と呼ばれます。

○翻字、読み下し文とは

近世以前は墨を使って文字を書いたことから、草書体の文書がほとんどでした。いわゆるくずし字です。これを解読して楷書に改めたものが、翻字と呼ばれます。翻字の文章は送り仮名がなく、漢文と変わりありません。意味をとらえるには、読み下し文に改めていく必要があります。

○候(そうろう)とは

候文は昭和初期まで使用されていました。銀行の約束手形にも「御座候(ござそうろう)」という文言が見られます。候は補助動詞として「ます」の意味があります。

○返読文字とは

漢文を訓読する時に、語順を逆にして、上に返って読む文字のことを言います。「以(もって)」「従(より)」「乍(ながら)」「などがありません。

○声を出して読み下し文を読む

古文書は、①送り仮名が少ない漢文調であること、②候文であること、③返読文字があることなどを特徴とし、意味を理解するには、文字の解読だけでなく、読み下し文にして、何度も声に出してみるのが大切です。次の例では、声に出して読めるよう、すべてひらがなで表記してあります。

① 乍恐 (おそれながら) (恐れ多いという意)

② 乍憚 (はばかりながら) (出過ぎたことと断る意)

③ 奉願上候 (ねがいあげたてまつりそうろう) (丁寧なお願いの意)

④ 奉恐入候 (おそれいりたてまつりそうろう) (恐縮する意)

⑤ 難有 (ありがたく) (感謝の意)

⑥ 被仰付 (おおせつけられ) (お命じになられる意)

(2) テキスト⑤の翻字文を読み下し文にしてみましょう。

乍恐以書付奉願上候

今般私儀、於御当地医道開業
仕度奉存候^ニ付、来五月迄滞留之儀
御聞濟被下置候様、偏^ニ奉願上候、以上

(読み下し文)

(表題)

恐れながら、書付をもって願ひ上げたてまつり候

(本文)

今般私儀、御当地において、医道開業
仕り度存じたてまつり候につき、来る五月まで滞留の儀
御聞き済み下され置き候様、偏に願ひ上げたてまつり候、以上

(参考) 仕り度 (つかまつりたく) 偏に (ひとえに)

○動詞、助動詞の活用形を意識して読む

助動詞「可(べし)」「の活用形は、未然形(べから)、連用形(べく・べかり)、終止形(べし)、連体形(べき・べかる)、已然形(べけれ)となり、連用形「可被下事」のようになり、「下さるべく候」と読まなければなりません。これが「可被下事」のように名詞の「事」が続く場合は、連体形の「べき」を用いて「下さるべき事」と読みます。活用形を意識することは難しいかもしれませんが、何度も読み返して慣れるようにしましょう。

(3) テキスト②のポイントとなる句を挙げましたので翻字を横に書いてください。

① 下置候

② 奉願上候

③ 御聞濟被下置候

④ 偏に奉願上候

⑤ 今般私儀

⑥ 於御当地

⑦ 医道開業

⑧ 仕り度存じたてまつり候

⑨



④と⑤の句は、一字分の空白があります。相手が高貴な人である場合、行為を示す言葉の上を一字か二字空けて、敬意を表します。これを欠字（けつじ）と言います。

（答え）

- ① 乍恐② 奉願上候③ 罷在候処（罷り在り候処 まかりありそうろうところ）
- ④ 被 仰付⑤ 被 仰聞（仰せ聞かされ）⑥ 難相成候（相成り難く候）⑦ 御聞
- 濟（御聞き済み）⑧ 被成下置（成し下し置かれ なしくだしおかれ）⑨ 難有
- （有り難く ありがたく）

（4）テキスト③のポイントとなる句を挙げましたので翻字を横に書いてください。

①



②

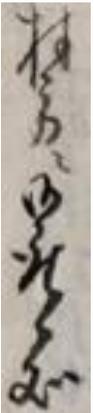


（答え）

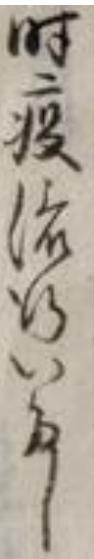
- ① 無御座候而者（御座無く候ては ござなくそうろうては）② 奉懇願（懇願 奉り こんがんとてまつり）

（5）テキスト⑥のポイントとなる句を挙げましたので翻字を横に書いてください。

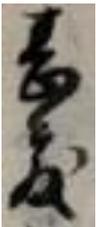
①



②



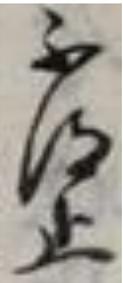
③



④



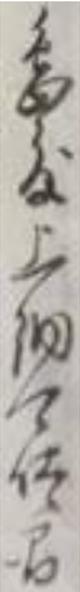
⑤



⑥



⑦



(答え)

- ①村方ニ御座候処
- ②時疫(じえき)流行いたし
- ③甚敷(はなはだしく)
- ④而已(のみ)ならず
- ⑤不得止(やむをえず)
- ⑥敷ケ敷次第(なげかしきしだい)
- ⑦急度上納可仕候間(きつとじょうのうつかまつるべくそうろうあいだい)

③と⑥の句には、「敷」が使われています。「委敷(くわしく)」「宜敷(よろしく)」「悪敷(あしく)」「厳敷(きびしく)」「怪敷(あやしく)」「などが、古文書によく登場する言葉です。

(6) 次の句は、テキスト⑦と⑧に登場するものです。興行関係の言葉が含まれていますが、どのように読むとよいでしょうか。



(答え)

① 俄踊仕度 (にわかおどりつかまつりたくうぎょう)

② 写絵興行 (うつしえこうぎょう)